

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XXVI)

竹 下 春 日

〔Ⅲ〕 預言の内容。—— (一) イエス・キリスト出現以前の出来事にかんする預言。—— (a) ヤコブとモーセの預言とその成就 (La. 646—Br. 711 (299) —— 『創世記』 48章22節, 同48章19)節。(b) イエス・キリストの出自たるユダ族にかんする預言 (La. 661—Br. 726 (314) —— 『創世記』 49章)。(c) ヨシヤとモーセにかんする預言及びユダヤ人の供え物にかんする預言 (La. 648—Br. 714 (301))。(d) 一人の預言者 (ダビテ) の出現にかんする預言 (La. 661—Br. 726 (314) —— 『申命記』 18章16節——19節)。(e) アッシリア人たちによるイスラエルの滅亡とヤコブ一族の一部残存, 及びダビテによる復興にかんする預言 (La. 652—Br. 715 (301) —— 『アモス』 9章8節——15節), 神はシオンを慰め, エルサレムを選ぶということ (La. 652——『ゼカリヤ書』 1章16節)。(f) ダビテがユダヤの王となること, 及びイスラエルが神の《長子》となることにかんする預言 (La. 644—Br. 713 bis (297) —— 『エゼキエル書』 37章25節, 『出エジプト記』 4章22節)。(g) ダビテ一族の永久支配は, 現世では決して実現しないという預言 (La. 639—Br. 718——『歴代志下』 7章18節, 『エレミア書』 33章20節)。(h) メデア・ペルシヤ・ギリシヤの諸王の史的変遷と, 神の摂理とにかんする預言 (La. 662—Br. 722 (315) —— 『ダニエル書』 11章), (i) クロスからアンティオコス並びにエピファネスに到る歴史的変遷 (La. 662——『ダニエル書』 11章)。(j) ユダヤ人の各地への散在 (ディアスポラ) についての預言 (La. 652—Br. 715 (302) —— 『イザヤ書』 27章6節, La. 661—Br. 726 (314) —— 『ダニエル書』 12章7節)。(k)

ユダヤ人たちの「終りの日」の審判にかんする預言 (La. 625—Br. 716 — 『ホセア書』 3章)。

(二) 新約にかんする預言。——La. 625—Br. 716 (『イザヤ書』 42章 9節), La. 637—Br. 729 (『イザヤ書』 43章16節, 『エレミヤ書』 23章 5節), La. 652—Br. 715 (305) (『イザヤ書』 43章16節——19節), La. 656—Br. 736 (309) (『詩篇』 第130篇 8節), La. 661—Br. 726 (314) (『創世記』 49章), La. 664—Br. 713 (317) (『イザヤ書』 42章 9節)。これらのうち、明瞭な三断章を挙げると、次の如くである——《預言。／メシアの世になると、彼はエジプトからの脱出をも忘れさせるほどの新しい契約を立てるために来られるであろう、——『エレミヤ書』 23章 5節, 『イザヤ書』 43章16節——彼はその律法を外部ではなく内心におかれるであろう、それまで外面的なものにすぎなかった彼への恐れを心のさなかにおかれるであろうと、預言されている。／すべてこれらのもののうちに、キリスト教の律法を見ないものがあるか。》(La. 637), 《新しい律法。『エレミヤ書』 31章32節 [現今の聖書では、31節]。》(La. 652), 《悪魔の頭をくじき、その民を「もろもろの邪悪から」解き放つべき救い主が来臨する。新しい契約が立てられ、それが永遠に続く。》(La. 656)。

(三) イエス・キリストにかんする預言について。——(a) イエス・キリスト来臨にかんする象徴的な言葉と預言。——イエス・キリストがメシアであったことを暗に象徴するものとして見做されうる章句を引用して、パスカルは次のごとく説いている、《「カエサルのほか、私たちに王はない」[『ヨハネ伝福音書』 19章15節]。だから、イエス・キリストはメシアであったのだ。なぜなら、彼ら〔ユダヤ人〕はもはや他国人しか王として戴かず、ほかの王を望んでもいなかったから。》(La. 631—Br. 720), 次に来臨にかんする預言としては、以下の三断章中のものが、これに相当する——La. 625—Br. 716中の『イザヤ書』関係のもの, La. 467—741 (224), La. 656—Br. 736 (309) [(二) に既出]。先づ La. 467は、次の如くである——《世界最古の二書は、モーセとヨブとである。一はユダヤ人、他は異教徒であるが、二人ともイエス・キリストをその共通の中心および目的と見なしている。モーセはアブラハム、

ヤコブなどに対する神の約束と、彼の預言とを語ることによって。ヨブは「どうか、私のことばを書きとめられるように、云々。私は知る、私をあがなうものは生きておられる、云々」と語ることによって。》

次に La. 625の全文は、次のようである——《『ホセア書』3章——『イザヤ書』42章, 48章, 54章, 60章, 61章及び終章 [66章]。「わたしは、ずっと以前からそれを預言していたのだ、それがわたしである事を知らせるために。」アレキサンダーに対するヤドア。》ところで、この断章中の《「わたしは、ずっと以前からそれを預言していたのだ、それがわたしである事を知らせるために。 (Je l'ai prédit depuis longtemps afin qu'on sût que c'est moi.)》なる引用章句に対して、Tourneur-Anzieu 版は、『イザヤ書』48章5節を指摘している*。同節は、次のごとくである——「いにしえから、かの事をあなたに告げ、／その成らないさきに、これをあなたに聞かせた。／そうでなければ、あなたは言うだろう、／『わが偶像がこれをしたのだ、／わが刻んだ像と、鑄た像がこれを命じたのだ』と。」この引用文中の「かの事」とは、同章3節中の「わたしはさきに成った事を、いにしえから告げた。」を指すものである。したがって第5節は、預言の成就が神ヤハウエの力によるものであって、ユダヤ人の崇拜する「偶像」の力によるものではないことを、主旨とするものである。

* Éd. Tourneur-Anzieu, tome I, p.219, note 3.

ところで以上の引用章句は、現行版聖書からのものであるが、パスカルの使用した聖書のそれは、これと少しく異なるのである。Tourneur の指示する『イザヤ書』48章5節に相当する部分は、《預言》の章中における La. 664—Br. 713のうちに見出される——《『イザヤ書』48章3節、「私はいにしえのことをあらかじめ告げさせ、ついでそれらを成し遂げた。それらは私が言ったように起こった。それはあなたがたがかたくなで、心がそむきやすく、あつかましいことを知っているからである。ゆえに、私は事が起こる前に、それらをあなたがたに示そうと思う。あなたがたがそれらをあなたがたの神々のわざ、神々の命令の結果であると言うことのないためである。》現行版聖書の48章5節は、このパスカルによる引用章句の内容の一部に相当すると判定しうるが*。

大意は両者同様と、見做しうるであろう。したがって、前出の《「わたしは、ずっと以前からそれを預言していたのだ、それがわたしである事を知らせるために。」》(La. 625)なる文章は、——Tourneur-Anzieu 版の言わんとする如く——預言を成就しうるという神(ヤハウエ)の大いなる力の呈示およびこの神によるユダヤ人の偶像崇拜禁止ないし異教神崇拜禁止を、その主旨とするものであると、言えよう。しかしわれわれは、より詳細なる検討を、この際必要としておるのである。

- * 厳密には、パスカルによる引用文の内容は、現行版聖書の『イザヤ書』48章の3節と5節との内容を合わせたものに相当する。因みにパスカルの使用した聖書には、ヴルガタ訳ラテン語聖書やヴァターブル多言語聖書があったことが、知られている。

該断章(La. 625—Br. 716)中に記された聖書の諸個処には、パスカルの象徴主義的解釈の立場から観るとき、極めて重大なる意味を持った種々の叙述が見出されるのである。——(イ)『ホセア書』3章5節には、「そしてその後イスラエルの子らは帰って来て、その神、主と、その王ダビテとをたずね求め、終りの日におののいて、主とその恵みに向かって来る。」という記述が見られるが、この文の後半の部分が、神による最後の審判および主イエス・キリストへの帰依を示すものと、パスカルの眼に映ったであろうことは、推測に難くない。(ロ)また《アレキサンダーに対するヤドア》とは、諸家の註するごとく、アレキサンダー大王がエルサレム攻略後、エルサレムの神殿に詣でた時、出迎えた大祭司ヤドアに犠牲を捧げて礼拝したと伝えられる事実(ヨセフス著『ユダヤ古代史』所載)に拠るものと考えられるが、田辺氏の註する如く*)、これは『イザヤ書』66章18節——20節にみられる預言と連関するものと、推測しえられる(66章が、パスカルの記した《終章》に相当することに留意)。同章同節中には、次の預言が述べられている——「『わたしは彼らのわざと、彼らの思いとを知っている。わたしは来て、すべての国民と、もろもろのやからとを集める。彼らは来て、わが栄光を見る。……』 / 『わたしが造ろうとする新しい天と、新しい地が / わたしの前にながくとどまるように、 / あなたの子孫と、

あなたの名は／ながくとどまる』と主は言われる。」(強調点は筆者による)。
以上の文は、——パスカルの立場から見て——イエス・キリストの来臨と新約とを象徴的に示すものと見做しうることは、明らかである。それゆえ《アレキサンダーに対するヤドア》とは、異邦人のキリスト教への回心の象徴的前兆と、解しえられるのである。

* 田辺保訳『パンセ』(ラフユマ版に拠る), p. 417, 註18。

(ハ) さらにパスカルの指示する『イザヤ書』54章中には、「わが契約は動くことがない」(10節)という言葉があり、同書61章にも「とこしえの契約」(8節)なる語を発見しうる。

(ニ) また同書42章中には、既出のごとく ([III]の (ニ) 参照), 新約にかんする預言が見られ、(ホ) 最後に、同書60章16節のうちには、「そして主なるわたしが、あなたの救い主、／また、あなたのあがない主」という記述を見出すことができる。

以上 (イ) ~ (ホ) を通じて、パスカルが fr. 625 を執筆する際、彼がメンアたるイエス・キリストの来臨・新約・異邦人の召喚と彼らの回心等新約聖書の記事を、その念頭に置いていたことは、もはやわれわれにとって明らかである。したがってわれわれは、改めて La. 625 中のパスカルが引用章句の形式で記した一文——《「わたしは、ずっと以前からそれを預言していたのだ、それがわたしである事を知らせるために。》*)における《それを》l' [—le] とは、イエス・キリスト関係の出来事を指すものと、パスカル自身解していたことは、われわれの想像に難くないところである。

* パスカルによるこの引用章句は、現行版聖書の『ホセア書』及び『イザヤ書』中において、そのまま一致する章句を見出すことは出来ない。

(b) 来臨預言の古さと永続性。——《預言。／ただ一人の人が、イエス・キリストの来臨の時期と仕方とを預言する書物を書き、イエス・キリストがそれらの預言に応じて来臨されたとしても、それは非常に有力な事実であろう。／しかし、ここにそれ以上のことがある。それは歴代の人々が四千年にわたっ

て、たえず変わらずつぎつぎに現われ、この同じ出来事を預言するのである。それを告知するのは、一民族の全体である。彼らは彼らのいただく確信を、一団となって立証するために、四千年にわたって存在する。彼らに対してなされたどんなおどしや迫害も、彼らをその確信から引き離すことはできない。これは格別重大なことである。》(La. 623—Br. 710)。

(c) 来臨の時期と来臨の仕方。——(イ) 時期について——《預言。／その時期はユダヤ民族の状態により、異教民族の状態により、神殿の状態により、年の数によって、預言された。》(La. 624—Br. 708)。(ロ) 来臨の仕方について——《……メシアによって王権が永久にユダヤにとどまり、また彼の来臨によって、王権がユダヤから取り去られるとしたら、彼はどのようなあり方をすればよかったのであろうか。／見ても見ず、聞いても聞かないというふうに彼らをするためには、これ以上の方法はありません。……》(La. 628—Br. 753)。この断章の最後の部分で言われていることは、より具体的には、イエス・キリストが《卑賤》*la bassesse* と《偉大》*la grandeur* の姿で来臨したことを、意味している——28° 《イエス・キリストの証拠》の章中における La. 585—Br. 793 参照。(ハ) 完全な道を教える人として来臨すべきイエス・キリスト——《彼は人々に完全な道を教えらるであろう [『イザヤ書』2章3節]。／そして、彼の前にも後にも、それに近い神聖なことを教えた人は、だれも来なかった。》(La. 616—Br. 733)。

(四) メシアの証人たち。——La. 622—Br. 748, Lr. 641—Br. 749 (29 4), La. 655—Br. 760 (308), La. 664—Br. 713 (317) (『イザヤ書』48章3節, 同書4章), La. 559—Br. 750 (271)。メシアの証人たちは、二通りに分かれる。一つはメシアを受け入れる霊的な人たちであり、他はメシアを拒否する人々であるが、パスカルにあっては、何れも固有の仕方、メシアの証人たる意義を持つのである——《「主は言われる、私は初めであり終わりである。私に等しいと思うものは、私がいにしえの民を造ってからこのかたしたことの経過を語り、また来たらんとすることを告げよ。／恐れるな、私はこれらのことを皆あなたがたに知らせたではないか。あなたがたは私の証人である」》

パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して (XXVI)

(La. 664—『イザヤ書』44章), 《(……彼ら〔ユダヤ人〕が描いているようなメシアなら, 私はほしくない) 明白なことは, 彼らをして彼〔イエス・キリスト〕を受け入れさせる妨げになったのは, 彼の生涯にほかならないということである。しかも, この拒否によって, 彼らは非の打ちどころのない証人となっただけでなく, さらにそれによって預言を成就させたのである。／》(La. 655).

(五) 肉的ユダヤ人に対する神の拒否についての預言。——La. 638—Br. 735, La. 648—Br. 714 (301) の終りに近い部分, La. 649—Br. 714 (302), La. 656—Br. 736 (309) の一部, La. 661—Br. 726 (314) (『アモス書』3章2節), La. 664—Br. 713の前半およびユダヤ人排斥の部分(『イザヤ書』59章9節, 同書65章), La. 652—Br. 715 (305) (『ゼカリヤ書』14章12節及び13節に相当する部分)。

(六) 神とイエス・キリストによる異邦人の召喚と回心にかんする預言。——La. 614—Br. 773 (『詩篇』第22篇27節), La. 615—Br. 730 (『詩篇』第72篇11節), La. 618—Br. 770, La. 621—Br. 725, La. 624—Br. 708 の終りの部分, La. 625—Br. 716 (『イザヤ書』66章), La. 629—Br. 724, La. 636—Br. 729 (『イザヤ書』52章16節), La. 644—Br. 713 bis (297) の初めの部分(『ゼバニヤ書』3章9節), La. 648—Br. 714 (301) の終りに近い部分, La. 652—Br. 715 (305) (『ヨエル記』2章28節, 『ホセア書』2章24節, 『申命記』32章21節, 『マラキ書』1章11節), La. 656—Br. 736 (309) の一部, La. 664—Br. 713 (317) (『イザヤ書』65章, 同書56章3節, 同書66章18節, 『エレミア書』7章)。これらのうち主要なものを掲げると, 次のごとくである——《彼〔メシア〕はユダヤ人と異邦人との王となるであろう。しかるに, このユダヤ人と異邦人との王は双方からはずかしめられ, 死をたくらまれるけれども, 双方の支配者である彼は, モーセの祭儀を, その中心であるエルサレムにおいて破壊し, そこに彼の最初の教会を建てる。また偶像の祭儀を, その中心であるローマにおいて破壊し, そこに彼の主要な教会を建てる。》(La. 615), 《あらかじめ多くの人々が来たのち, ついにイエス・キリストは来臨して言われた。

「私はここにいる。時は来た。私はあなたがたに言う、預言者たちが、時が来たら起こると言ったことを、私の使徒たちは行うであろう。ユダヤ人は捨てられ、エルサレムはやがてこぼたれ、異教徒は神を知るようになるであろう。あなたがたが葡萄園の世継ぎを殺したのち [『マルコ福音書』12章6節——8節]、私の使徒たちがそれを行うであろう」(La. 618)、《預言。／第四王国のころ第二神殿の破壊前、ユダヤ人の主権が除かれる前、ダニエルの第七十週に、第二神殿が存在している間に、異教徒は教えを受け、ユダヤ人の拝する神を知るようになるであろうということ。……そうしたら、第四王国のころ、第二神殿の破壊前に、等等に、異教徒が群れをなして神を拝し、天使のような生活をするようになった。……いったい、これらは何事であろうか。それは久しい以前から預言されていたことなのである。二千年来、一人の異教徒もユダヤ人の神を拝まなかった。なのに、預言された時期になると、多数の異教徒がこの唯一の神を拝する。神々の宮はこぼたれ、王たちも十字架に服従する。いったい、これは何事であろうか。それは神の霊が地上にそそがれたのだ。／モーセからイエス・キリストまでは、ラビたちの言葉に徴しても、一人の異教徒すら信じない。イエス・キリスト以後、多数の異教徒がモーセの書信じ、その本質と精神とを守り、そのうちの無益なものだけを退ける。》(La. 629)。

(七) キリスト教会にかんする預言。——《栄光ある第二の神殿。イエス・キリストはそこに来られるであろう。『ハガイ書』2章、7、8、9、10節。『マラキ書』。グロティウス [同人著『キリスト教の真理について』五の14]。》(La. 652—Br. 715 (305))。《「しかるに、この王たちの日に、神は一つの国を建てられる。これはいつまでも滅びることがなく、ほかの民に帰することもない。これはほかのもろもろの国を散らし、かつ滅ぼす。しかし、その国はとこしえに続くであろう。……」》(La. 662—Br. 722 (315))。

(八) 預言の基本的に示すもの。——預言が基本的に示すものは、神の契約の确实性と永遠性である。断章 La. 625—Br. 716中に、パスカルによって記されている『イザヤ書』54章及び61章を検討するとき、われわれはこの事を察知するのである。同書54章10節の「山は移り、丘は動いても、／わがいつく

パスカルの《アポロジ》のプラン復元に関して (XXVI)

しみはあなたから移ることなく、／平安を与えるわが契約は動くことがない』
と／あなたをあわれまれる主は言われる。」は、神の契約の不動の 確実性を語
るものであり、また同書61章8節の「主なるわたしは公平を愛し、強奪と邪悪
を憎み、真実をもって彼らに報いを与え、／彼らと、とこしえの契約を結ぶか
らである。」は、明らかに神の契約の永遠性を示すものである。而してこの神
の契約の揺るぎなき確実性と永遠性こそが、パスカルの所謂《一方〔旧約〕の
預言が他方〔新約〕において成就している》(La. 508——25°章の〔IX〕参照)
ことを、根本的に保証するものであり、パスカルに対して、彼の《神の証明方
法》の正しさを確信せしめる、当のものであったに相違ないのである。

(XXVI 回了)